

地域からの発信 ～水環境研究の社会実装に向けて～

地域水環境行政研究委員会／共催：全国環境研協議会

1. はじめに

地域水環境行政研究委員会は2019年に発足した研究委員会で、今年で6年目を迎えた。昨年度のシンポジウムに引き続き、全国環境研協議会に共催いただき今回のセッションを開催した。セッションでは、西嶋渉委員長（広島大）による趣旨説明の後、招待講演として環境省の鈴木清彦氏にご講演いただいた。また、2024年度「地域水環境行政研究委員会優秀論文賞」を受賞した千葉県環境研究センターの横山智子氏にご講演いただいた。その他に7件の研究発表が行われた。

2. 講演・発表の概要

2.1 最近の水環境行政について 2024

（環境省、鈴木清彦氏）

令和6年5月に閣議決定された第6次環境基本計画のうち、水環境に関連する「人の命と環境の保護」や良好な環境の創出による「ウェルビーイング／高い生活の質」の実現などについて、具体的な施策の動向や、いま検討している方向性などが紹介された。

2.2 水質鉛直分布調査による東京湾内湾の底層溶存酸素量の中長期変動

（千葉県・環研セ、横山智子氏）

底層DOの低下を検討するうえで貴重な基礎資料になり得る、同一日・多地点における水質鉛直分布の中長期変動について、千葉県で長年蓄積されてきた膨大な水質データと底層DOとの関係を検討した結果が紹介された。

2.3 岩手県三陸沿岸域における水質の現状と課題

（岩手県・環保研セ、高橋幸子氏）

流入河川の汚濁負荷流入量が減少傾向であるにもかかわらず、湾奥部のCODが環境基準を上回る傾向がみられている大船渡湾について、COD成分に関する水質データを収集・評価した結果が紹介された。

2.4 東京湾におけるCODの上昇に関する調査研究

（川崎市・環総研、小林 咲氏）

CODが上昇傾向にある川崎市海域において、内部生産がCOD上昇に及ぼす影響の実態調査、過去の観測データを用いたCOD上昇に及ぼす因子の解析結果が紹介された。

2.5 東日本大震災以降の大船渡湾底質中の多環芳族炭化水素（PAH）モニタリング調査

（国環研、牧 秀明氏）

東日本大震災時に火力発電所燃料タンクや石油コンビナートの損壊・火災等に起因し大規模な油流出が生じた

大船渡湾について、震災1年後の2012年から2023年までの底質中PAHのモニタリング調査結果が紹介された。

2.6 諏訪湖におけるヒシ除去の水質への物理的影響評価

（大阪大、入江政安氏）

水草による流動阻害を考慮した諏訪湖の流動水質計算を行い、水草の繁茂あるいはその除去が諏訪湖内の流動および貧酸素水塊に及ぼす物理的影響を評価した結果が紹介された。

2.7 マイクロプレートリーダーを用いた簡易大腸菌測定技術を用いた河川水の分析

（北海道大、田中佑奈氏）

河川水中の大腸菌濃度に影響を与える因子として、塩素処理された大腸菌の再増殖、流域からの大腸菌の流入、大腸菌負荷減としての河床生物膜の影響を定量的に解明することを目的に実施された解析結果が紹介された。

2.8 福島県を対象とした気候変動に伴う洪水による間接被害の影響推計

（福島県・環創セ、TAN JIAZE氏）

気候変動にともなう洪水による経済的な影響について、地域間・産業間の関連性のために周辺地域にも波及し、長期間にわたって負の影響を及ぼす可能性のある間接被害を考慮した長期的な影響を検討した結果が紹介された。

2.9 北海道の河川・湖沼・湿原の水環境保全に向けたエネルギー・環境・地質研究所の取組と課題

（北海道総研・工環地研、木塚俊和氏）

水資源の保全と持続的な利用を図るための研究を展開している北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所の水環境行政に係る近年の研究事例について、成果の社会還元に向けた今後の課題を含めて紹介された。

3. おわりに

本研究委員会では、本セッションにおける優れた研究発表を称賛し、その実績を周知するために「地域水環境行政研究委員会優秀発表賞」の表彰制度を設けている。今年度の受賞者は大阪大学大学院の入江政安氏および岩手県環境保健研究センターの高橋幸子氏となった。受賞の詳細は本研究委員会HPに掲載している（<https://jswe-local.org>）。

次年度以降も、産官学を交え、地域の水環境の諸問題に対応する有益な情報交換の場を継続する予定である。また、優秀発表賞および優秀論文賞の表彰も継続予定である。会員の皆様には、ぜひ、入会の検討およびセッションでの発表をお願いしたい。

（東京都環境科学研究所 石井裕一）